

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 2 年 6 月 5 日現在

機関番号：34315

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K03152

研究課題名(和文) 日韓両国における朝鮮人特攻隊員の受容と記憶に関する比較研究

研究課題名(英文) A comparative study on the acceptance and memory of Korean kamikaze pilot in Japan and Korea

研究代表者

権 学俊 (KWON, HAKJUN)

立命館大学・産業社会学部・教授

研究者番号：20381650

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、日韓両国における朝鮮人特攻隊員の成立・誕生、発見と「記憶」を明らかにするとともに、彼らに対する認識が戦前から現在までどのような変容したのかを明らかにした。戦時中「軍神」として讃えられた朝鮮人特攻隊員は、植民地解放を契機に歴史の汚点と見なされ、歴史の記憶から抹消された。1980年代から日本における慰霊碑建立、韓国における映画『ホテル』上映、そして朝鮮人特攻隊員「帰郷祈念碑」建立をめぐる一連の出来事では、日韓双方の歴史認識に対する歩み寄りの限界が明らかとなった。だが、日韓社会の社会的な成熟と共に、朝鮮人特攻隊員の位置付けを総合的に判断し、客観的に捉え直す動きは最近確実に見られている。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、第1に、「戦争」と「同化」と「国家暴力」が折り重なるように押しつけられた朝鮮人特攻隊員という戦跡を歴史社会的に究明する国際的な学際的アプローチができた点、第2に、朝鮮人特攻隊員の「同化」政治の力学、植民地政策史上の位置、朝鮮人特攻隊員が創出・消費される力学の相違など、包括的な分析を通じて、日韓の社会的特質を浮き彫りにしたこと、第3に、これまで研究の及んでいなかった朝鮮人特攻隊員に関する国民意識の変容研究ができたこと、第4に、以上の検討を通じて、日本と韓国の近現代史と現在の私たちの課題を見直すこと、日韓の近現代社会研究の進展が期待できることから、本研究は積極的な意義を持っている。

研究成果の概要(英文)： The purpose of this report is to investigate how perceptions towards Korean commandos have changed from the 1940s to the present day. Under Japan's administration of Korea, Korean commandos were once worshiped as gods. But they have since been considered a stain on history. They have largely been deleted from the annals of history since Korea's liberation from Japan's colonial rule. The images of Korean commandos surfaced in a movie [hotaru] and again highlighted amongst the monument problem, but the underlying issues remain unsettled to date. Public opinion of the commandos who died during the war is still negative, and there still has been no big change up until now. But from the effect of democratization and repairs to the past, public opinion began to change. There is a need to judge the Korean commandos at a general level in order to objectively reconsider the matter.

研究分野：アジア史、現代日本社会論

キーワード：朝鮮人特攻隊員 植民地朝鮮 国家暴力 同化 国民意識 鹿児島知覧 忘却 歴史認識

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

#### 1. 研究開始当初の背景

(1) 太平洋戦争当時、決して少なくない数の朝鮮人青年が戦火に吞まれ犠牲となったが、戦後日本と韓国社会において「朝鮮人特攻隊員」という戦跡はどのようなプロセスを経て両国社会に受け入れられ、「発見」「消費」されたのか。そして、日本と韓国における朝鮮人特攻隊員に対するイメージが戦前から現在までどのような変容を遂げたのか。その史的プロセスや社会的力学については、歴史社会学的な検証が進んでいるとは言い難い。

(2) 日本における政治学研究、歴史社会学の側、国外(韓国・台湾をはじめとする東アジア学界)からこの問題を眺めてみても、この問題について正面から総合的に考察した研究はない。日本軍の神風特攻隊に「朝鮮人」が存在したという事実は、近年少しずつ真実が明らかとなっている朝鮮人 B・C 級戦犯、シベリア抑留者問題等とは異なり、日本社会と韓国社会においては長らく忘れられた主題であった。戦争の最終段階で行われた神風特攻隊、特に朝鮮人特攻隊員については真剣な学術的接近が全く行われていなかったのである。このような状況の中、これまで社会的議論や学術研究の対象にならなかった日韓社会における朝鮮人特攻隊員の存在を総合的に検討する必要を感じ、本研究を開始するようになったのである。

#### 2. 研究の目的

(1) いかなるプロセスで朝鮮人特攻隊員が成立・誕生したのか。その歴史的・社会的な背景は何だったのか。朝鮮人特攻隊員の存在と歴史の実態を明らかにする。

(2) 日本社会と韓国社会における「朝鮮人特攻隊員」という戦跡は、地域の中で、あるいは全国において、どのように発見されたのか。そのプロセスを歴史社会学的に跡付けるとともに、両国のメディアがいかなる政治・社会背景のもと、朝鮮人特攻隊員とその記憶をどう扱ってきたのかを総合的に分析する。

(3) 日韓社会における朝鮮人特攻隊員に関する意識・イメージが戦前から現在までどのような変容を遂げたのかについて分析する。朝鮮人特攻隊員の存在は、日韓国民の意識にどのような刻印を残したか、いかなる国民意識を創出したのか、どのように人々の「戦争観」の形成に関わったのかを明らかにする。

#### 3. 研究の方法

(1) 朝鮮人特攻隊員の存在と歴史の実態を明らかにするため、地域の公文書館・図書館・資料館で、朝鮮人特攻隊員に関する当時の公文書を入手し、それぞれの地域で朝鮮人特攻隊員が誕生されるプロセスと、そこに浮かびあがる地域や当事者の言説を洗い出した。朝鮮人特攻隊員として直接参加した生存者への聞き取り調査も行った。

(2) 日韓メディアにおける朝鮮人特攻隊員の言説・表象を明らかにするため、地域紙や全国紙の記事をはじめ、映画・ドラマ・マンガ、そして主要ウェブサイトの言説で、朝鮮人特攻隊員にまつわる戦史がどう扱われたのかを調査した。日韓メディアはいつから、いかに朝鮮人特攻隊員を発見し、描いたのか。その記憶をどう扱ってきたのか、日韓メディアが作り出す朝鮮人特攻隊員に対する言説・表象はいかに相違していたのかについて調査・検証した。

(3) 両国民がいかなる政治・社会背景(冷戦の影響、朝鮮戦争、反共・反日、独裁政権など)のもと、朝鮮人特攻隊員をどう捉えたのか。冷戦の激化やその後の終結が朝鮮人特攻隊員に対するいかなる評価につながり、どのような意識を生み出したのか。戦前から現代社会まで両国における朝鮮人特攻隊員に関する「国民意識」を検証した。

#### 4. 研究成果

(1) 日本は帝国主義の国々の中で、植民地の現地住民で構成された部隊の養成と将兵の採用をしない唯一の国家であったが、真珠湾攻撃でアメリカがアジア太平洋戦争に介入するようになると、翌年には「兵役法」を改正し、1944年4月から朝鮮人が全面的な徴兵令の適用対象になる。軍事動員が進められる中、戦争が拡大されるにつれて熟練した「航空人力」の確保は、至急の問題であり、素晴らしい操縦士を養成することは戦争の勝敗が懸かった重大な問題であった。そこで、朝鮮総督府は朝鮮人青少年達の「空に対する憧れ」を積極的に扇動し、操縦士不足という緊急の問題に対して朝鮮人が操縦士に志願できる制度を整備する。陸軍少年飛行兵制度、航空機乗務員養成所、陸軍特別操縦見習士官、特別幹部候補生制度の導入を通して、朝鮮の若者を戦争に動員する。また、朝鮮総督府は軍官民合同団体である「朝鮮国防航空団」を設立するとともに、操縦士に最も適した「若年層」を動員すべく、国民学校における飛行機等の模型製作を教程化するとともに、大々的な航空イベントを開催し、朝鮮の子ども達の空に対する憧れをさらに刺激した。この時期の朝鮮の雑誌や新聞には、頻繁に「飛行機」や「操縦士」に関する言説が登場している。植民地朝鮮における戦時動員、航空政策を明らかにした。

(2) 現在海軍の特攻隊員になった朝鮮人は確認できず、特攻で死んだと確認されている朝鮮人

18名はすべて「陸軍」であるが、朝鮮では朝鮮人が特攻隊員となり「特攻死」したことが戦時動員のための絶好の「宣伝道具」とされた。特攻死した朝鮮人は朝鮮の新聞を通じて大々的に報道され、戦争英雄「軍神」として仰がれたのである。特に「最初」の朝鮮人戦死者である印在雄を特筆大書し、最初の報道以降三週に渡り、紙面は彼への追悼や「半島の神鷲松井伍長に続け」「松井伍長を見習おう」という各界の声明が続く。特攻作戦が事実上終結する1945年7月まで、新聞上は『毎日新報』に特集された印在雄ら朝鮮人特攻隊員8名の報道で溢れ返り、彼らの「死」は、朝鮮総督府の主導により新聞のみならず、ラジオ・雑誌・文学作品・映画等あらゆる分野で、軍部関係者、親族や教員、地元の名士らまでをも巻き込んで「半島の神鷲」と祭り上げられた。この時期、朝鮮人特攻隊員が軍神として登場する特攻映画『愛と誓ひ』と『榮光』が制作・上映されたことも注目すべきであるが、この点を含めて、「軍神」となる朝鮮人特攻隊員のプロセスを明確に分析することができた。

(3)「軍神」と祭り上げられた朝鮮人特攻隊員の評価も、日本の敗戦と共に幻の如く消え去り、植民地解放を契機に、支配国である日本に対し燃り続けていた韓国人の「反日感情」が溢れ出すばかりか、後の朝鮮戦争において韓国のために戦った死者の存在も重なって、「日本のために戦った」太平洋戦争の戦没者に対する世間の眼は冷ややかで、家族を失った遺族さえも冷遇される一方であった。そして解放後は、植民地時代の反日闘争・独立運動が韓国社会の戦時中の公式的な記憶として定着し、韓国の歴史が「再生産」されたため、朝鮮人特攻隊員の存在は公的な歴史から意図的に「抹消」「追放」された。彼らの存在はいきなり途絶えることになるのである。さらに、韓国政府は、植民地経験を建国過程における政権の創出と国民統合のために積極的に活用する。独立運動を行った人々に対する記念行為を大々的に行う等、朝鮮の独立を志向した民族主義的な思想や運動に政治的な正当性を付与した。そして複数の政権では、国家アイデンティティ樹立のため、反日主義のイデオロギーを徹底的に利用したのである。戦後初期日本と韓国における特攻隊員の存在と認識を浮き彫りにした。

(4)朝鮮人特攻隊員の存在は、韓国よりも先に日本社会において、1980年代頃から徐々に注目を集めるようになる。ドキュメンタリーや関連書籍が公開されるものの、1990年代に入ると作品発表がぱったりと止んでしまう。しかし、2001年に映画『ホタル』が公開され、話題になると、この作品の刺激を受けて朝鮮人特攻隊員問題が再び関心を浴びる。その中、朝鮮人特攻隊員に関する韓国民の意識を把握できる出来事がある。韓国における映画『ホタル』(監督・降旗康男)上映と韓国人の反応である。日本では、日本映画興行収益9位、国内観客数210万人を記録した『ホタル』であったが、2002年韓国における『ホタル』上映は、興行や世論の喚起には失敗し、途中で打ち切られた。韓国で「闇の子」として扱われ、忘れ去られた朝鮮人特攻隊員の存在が、『ホタル』を通して突如として登場したが、韓国民は朝鮮人特攻隊員の存在そのものを受け入れなかったのである。当時の韓国では、特攻隊員は日本のために死んだ対日協力者だという認識が依然根強く、映画もともかく、「朝鮮人特攻隊員」という存在自体を受け入れ難かったという面も見て取れる。

(5)朝鮮人特攻隊員を通して、両国民の「戦争の記憶」のずれと国民意識を把握できる事件は日本における朝鮮人特攻隊員の慰霊碑建立計画をめぐる一連の動きであった。戦後の日本において、最も早く朝鮮人特攻隊員の存在に注目し、遺族探しに取り組んだのはかつての戦友達であった。彼らは何度も韓国在住の遺族と接触し、知覧特攻基地戦没者追悼式への招待と慰霊碑建立を、1980年代から何回か試みたが、碑文中の一文をめぐる日韓が対立し、中止となった。碑文中の「君の熱烈な忠誠と尊い犠牲」「報いなき戦いに強いられて」という文言のため碑の建立中止にまで追い込まれたのである。その後1995年「戦後50周年の記念行事」として知覧から出撃した朝鮮人特攻隊員11人の慰霊碑を建立しようとする動きも現れたが、この計画も、「戦後の一切り」とする日本側の意識への反発・抗議により三たび中止となった。

(6)女優・黒田福美が、特攻隊員として死んだ朝鮮人特攻隊員・卓庚鉉を慰霊するために彼の故郷である韓国泗川市に建てようとした「帰郷祈念碑」の除幕式をめぐる事件は、亡くなった人々に対する「慰霊問題」や日韓間の歴史認識の違い、歴史認識による両社会の理解の相違点を明らかに見せてくれた事件であり、朝鮮人特攻隊員に関する韓国人の意識を把握できる出来事でもあった。女優黒田福美が中心となって推進した「帰郷祈念碑」の除幕式は、韓国泗川市と建立までの過程で協力した韓国人の強い支持・支援があったため、除幕式も無事に開催されるかに見えたが、除幕式直前、インターネットやマスコミを通じて祈念碑のことを知った地元の人々、関連団体の反対デモによって中止、慰霊碑は撤去された。朝鮮人特攻隊員・卓庚鉉の慰霊碑をめぐる論争の核心・韓国社会の反応は、彼の立場をどう解釈するかである。卓庚鉉の慰霊碑をめぐるハプニングは、日韓の歴史認識の相違点、亡くなった人々に対する哀悼の権利、すなわち、その権利は誰に属して行使すべきか、という問題、また未だ続いている記憶闘争の様相を理解する上でいくつかの重要な示唆点を提起していることが把握できた。

(7)敗戦後の日本における朝鮮人特攻隊員の語られ方は、支配国に従わざるを得ない朝鮮人という宿命や、特攻作戦の悲哀性ばかりを引き出し、殊更『ホタル』に象徴される典型的な「感動」

「悲劇の主人公」のイメージが過剰なまでに強調された。そこで描き出された「朝鮮人特攻隊員像」がその全てであるかのように、特攻映画の素材や「戦後の一区切り」、「日韓親善の手段」として日本社会で消費されており、日本の植民地支配に関する批判的な論調からは切り離された次元で扱われる傾向にある。映画や書籍の影響を受け、多くの日本人が鹿児島県の「知覧特攻平和会館」や「ホテル館 富屋食堂」等に足を運び、朝鮮人特攻隊員の存在に触れられる機会があったであろう。しかし、知覧特攻平和会館に並べられた朝鮮人特攻隊員一名の遺影や慰霊碑の前で日本人が流した「涙」には、果たして特攻隊員という悲劇的な犠牲者への「ノスタルジア」以上の意味は込められていたのでしょうか。我々がこうした情動的な観点のみでこの問題を捉えたままでは、いつまで経っても問題の根本的な理解には結び付かないばかりか、先の慰霊碑問題のような日韓間のすれ違いがいつ再び起こっても不思議ではないであろう。今一度、日本が行った戦争時の植民地支配が被支配者にもたらした肉体的・精神的被害の大きさを直視し、彼らのような「歴史の犠牲者」を生み出した責任を日本社会が受け止め、自らに対して厳格かつ自省を込めた視点を持ってこの問題と向き合っていかなければならない。

(8) 韓国においては、2000年代に入り民主化が進展すると、太平洋戦争に参加した一部の軍人・軍属に関しては日本の戦争による「犠牲者」とであると認め、彼らの名誉を回復させ補償への道を開こうとする委員会等が発足し、多様で積極的な過去の清算、「親日問題」を政府と市民が具体的に深く議論できる環境が整っている。韓国国内の社会的な成熟と共に、少しずつではあるものの世論の変化も見受けられ、近年のこの問題を扱う研究やドキュメンタリー番組の内容を見ても、朝鮮人特攻隊員の位置付けを総合的に判断し、客観的に捉え直す動きは確実に見られる。依然として色濃く残る反日感情など様々な要素と結び付き、問題の早期決着は難しい状況の中で、現代の韓国社会の中から生まれつつあるこうした流れを、今を生きる人々がどのように受容し、議論していくかという点も、今後「朝鮮人特攻隊員」という事実を韓国全体が受け入れ、彼らの存在が正当に認められる社会の構築に向けて一歩ずつ前進する上で、非常に大きな分岐点となってくるであろう。

(9) 3年間の研究を通して、日韓社会における朝鮮人特攻隊員に関する学問的検討の基盤を築くことができただけでなく、( ) 近・現代日本社会と戦争・戦跡など関連分野の研究深化、( ) 陸軍特攻隊関連研究の進展、( ) 植民地朝鮮の支配・統治政策に関する分野に貢献できると考えられる。また、( ) 朝鮮人特攻隊員という戦跡を通して、日韓国民の戦争観、国民意識に関する学問的検討の基盤を築くことができ、またミクロな国民意識変動を精査できるという点で、学界に与える研究効果は極めて大きいと考えられる。さらに、( ) 本研究を通して掘り起こした朝鮮人特攻隊員関連の史実・史料は、植民地研究・朝鮮人特攻隊員研究の基礎資料ともなり得るものである。

だが、いまだその存在すら明らかになってない海軍の朝鮮人特攻隊員や朝鮮人・台湾人のみで構成された神風特攻隊の実態、そして占領地(旧外地)・インドネシア等の特攻隊員にまで「足のばし」して、調査・データ化することが今後に残された課題である。

#### 【引用文献】

権学俊「韓国における朝鮮人特攻隊員像の変容」『立命館産業社会論集』52/ 4、2017、67 - 81  
権学俊「日韓両国における朝鮮人特攻隊員に対する意識変容と追悼・忘却」『日本語文学』67巻、2014、495-522

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 権学俊	4. 巻 68
2. 論文標題 現代日本における排外主義と歴史修正主義 排外主義の拡散過程とネット・サブカルチャー	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本文化研究	6. 最初と最後の頁 5-43
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 権 学俊	4. 巻 29
2. 論文標題 現代日本における国家主義・排外主義に関する一考察	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本研究	6. 最初と最後の頁 357-394
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する
1. 著者名 権 学俊	4. 巻 53-4
2. 論文標題 近代日本における身体の国民化と規律化	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 立命館産業社会論集	6. 最初と最後の頁 31-49
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 権学俊	4. 巻 52- 4
2. 論文標題 韓国における朝鮮人特攻隊員像の変容	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 立命館産業社会論集	6. 最初と最後の頁 67-81
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 2件 / うち国際学会 4件）

1. 発表者名 権 学俊
2. 発表標題 日本の排外主義と歴史修正主義
3. 学会等名 韓国研究財団研究会（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 権 学俊
2. 発表標題 朝鮮人特攻隊員という「戦跡」
3. 学会等名 世明大学人文社会学講座・特別講演（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 権 学俊
2. 発表標題 日本社会における「戦跡」による街づくり
3. 学会等名 地域創生主義「韓・日・中 国際学術シンポジウム」教育部・韓国研究財団国際シンポジウム（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 権 学俊
2. 発表標題 朝鮮人特攻隊員に対する日韓両国社会の認識と受容
3. 学会等名 教育部・韓国学術財団国際シンポジウム（国際学会）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 権学俊
2. 発表標題 日韓両国における朝鮮人特攻隊員に関する認識と受容
3. 学会等名 第22回社会文化学会全国大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 権学俊
2. 発表標題 戦後日本保守政治家の歴史認識と日韓関係
3. 学会等名 世明大学人文社会学講座・特別講演（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 権学俊
2. 発表標題 日本におけるダークツーリズムと地域活性化
3. 学会等名 教育部・韓国学術財団主催 韓日中「国際学術シンポジウム」（国際学会）
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------	---------------------------	-----------------------	----